

研究発表 1

社会科教科書の言語表現について～小・中学校の歴史教科書叙述をめぐって～

社会科教科書の問題点

二谷 社会科教科書における言語表現に関する問題は、いかに基礎・基本に関わる社会的事象（学習指導要領の目標・内容・内容の取り扱いを含む）を的確に説明するかであり、ややもすれば社会科術語の羅列的解説に陥りがちなことです。一番の問題点はこういうところにあるのではないかと。先ほどの高木さんのお話ですと、用語の問題になるだろうと思います。社会科教育の研究者である谷川彰英さんも教科書の機能（資料）について、6つほど挙げておられますが、それについて考えますと、私は基本的な機能は「知識伝達機能」であり、その主たる媒体は文字・文章であり、他の機能は補完的な機能であろうと考えています。社会科という教科はその誕生期においては、日本社会の民主化という使命から、討論授業など児童・生徒の学習活動を中心とした新しい教科書像が模索されたはずなのです。しかし、伝統的な読本式の教科書像は突き崩せなかったのではないかと考えております。

近年、児童生徒の興味関心、学習意欲の喚起、授業者側のあり方の変化などから、教科書は挿図・資料・写真類などビジュアル化によって「調べる、考える」教科書へと転換が図られつつあります。しかし、基本的には、重要用語をゴシックで表現する社会科教科書は、正解を覚えるための教科書であり、「客観的でしかもいきいきとした基準をしめす教科書」を作ることは難しいといわざるを得ない状況です。私自身が考えているようなことを少し羅列してみましたけれども、客観的であることは科学的であり、学問的成果に裏打ちされたものと考えます。しかも、児童生徒の持っている偏見、具体性のない観念的なものをひっくりかえしていく機会形成が行なえる教科書叙述が求められていると思います。イメージ豊かな事実があり、その事実の推移の物語る社会の複雑さ、意外さと、その中で浮き沈みする人間の生きざまへの感動という「いきいきとした内容」を示せるものであって欲しいと願っています。しかし、そのような内容を示すには、あまりにも教科用図書に対する制限が多すぎます。欧米の教科書に比べ、圧倒的に分量が限られたページ数の日本の教科書では、ビジュアル化も生きてこないのが現状ですし、また、児童・生徒が文章に魅力を感じる、臨場感あふれるような教科書文は、なかなか作れないと思います。それは制限ページ等々いろいろな規制があるからです。

小・中学校の歴史教科書を比較して

～文体・表現を考える～

小学校・中学校の歴史教科書の比較においては、学部の4年生に両方の教科書を読ませて、比較してもらいました。ある学生が書いたものの第一点は小学校「です・ます」調、中学校は「である」調で、その中でやはり小学校の方が歴史をより身近に感じると書いております。

その事例はそこに小学校の日本文教出版の教科書と、中学校は日本書籍の教科書を挙げておりますが、両者を比較してもどちらかといえば小学校の方が親しみやすく、中学校の方が親しみにくいというふうに判断をしているようであります。織田信長についての事例（資料）がそこに挙がっ

ておりますが、どちらかといえば小学校は人物を中心に書かれておりますので、ことばとして飛び交っていく中には、「気性の激しい武将」とか、「鬼と呼んで恐れられた」というようなことも入っております。中学校では信長の人物像を表すことばは前面に出てきませんで、歴史の事実経過の中で、淡々と述べられていてあまり面白くないのではないかと、というふうに書かれてくるわけです。原爆投下、ソ連参戦、日本の降伏について小学校・中学校の教科書をみまると、やはり、書き方はかなり違っております。小学校では、日本の降伏の理由として原爆投下とソ連参戦が並列していますが、中学校の場合はその上に、原爆投下の理由として冷戦構造が書かれています。

聖徳太子は「日本人」ではない

～社会科術語の難しさ:「日本」と「国」を取り上げて～

次に用語の問題にこだわりました。最初に「聖徳太子は日本人ではない」と書きましたが、社会科術語の難しさの問題に関わっていますと、今日は「にっぽん」といった方がいいのか、「にほん」といった方がいいのでしょうか。それと「国」ということばを取り上げてみますと、小学校の教科書の中の「日本」という用語を教科書の始めから終わりまで取り挙げていきますと、取りこぼしもあるかもしれませんが、古墳時代から現代まで、「日本」あるいは「国」というものが同義語として使われて、歴史的变化がないのです。聖徳太子につきましては、聖徳太子の時代と「日本」という国号の使われた時代とは違うものでして、「日本人」というのをどう定義するかということを考えますと、「日本」も「日本人」も「日本国民」もなかった時代であります。日本列島には多様な人々の社会と文化が開花していたにも関わらず、国民国家の枠組みを自明の前提とした国史的な日本史像、国史像に強く縛られているのではないかと、という意味でこの聖徳太子は日本人か、という見出しを出してみたわけです。これは歴史意識とことばの問題として重要です。

なぜ、こんなことを論ずるかというのは、これらの教科書で書かれている「日本」(資料)は、国ということば、あるいは我が国ということばに置き換えても使用できるわけです。日本語の「国」は、多義生・ファジー性をもつ。挙国一致・一億玉砕・一億総懺悔等々に繋がっていくわけですが、そこにはやはり曖昧な日本・日本人・日本史イデオロギーというものが固定的になっていて、十分に批判することなく戦後文化国家・民主国家・平和国家と軍国主義・天皇制イデオロギーによる皇国民錬成国家を平然と塗り替えてしまえるのは、この「国」ということばの多義性に由来するのではないのでしょうか。英語に置きかえれば、land(自然な土地=国土)、country(郷里から国まで含む生活共同体)、nation(政治的統一体)、state(国家権力機構)、government(政府)など「国」というのはこのような形で使い分けができるのですが、全部これを含み込んで、教科書の中では「国」とか「日本」という非常にのっぺらぼうな形で使われています。

「村から国へ」というふうが始まるのが小学校の教科書ですけど、「日本は、どのようにして、一つの国にまとまっていったのでしょうか。それはいつごろのことでしょう。」という認識が小学校6年生の日本史で形成されていく事柄です。教科としては、こくご・国語と相乗的な関係をつくって、我が国というエスノセントリズム、あるいはナショナリズムというのか分かりませんが、そういったアイデンティティーを形成していつてしまうのではないかと。

「農民」ということばの持つイメージ

四つ目は「農民」ということばを出しましたが、これは歴史の内容との関わり合いで、小学校の教科書は直接生産者は昭和の時代に入るまでほとんど農民が圧倒的に多く登場しまして、前近代でも遊牧民が登場するくらいで、海民とか、製塩民、製鉄民といったようなものはほとんど登場いたしません。本来は「ひやくしょう」ということばになっておりますけど、いろいろな職業を持った人々を「ひやくせい」と呼んでいただけですし、京都の都市民が「地百姓」といわれていたこともございます。教科書を分析した学生はどれも暗いイメージしか書かれない、明治以降になっても、農民であるが、農業従事者に変えてはどうかと提案をしております。

解釈の授業としての社会科

最後に広島大学の池野範男さんは「社会科の授業には、事実というものは存在しない。存在するのは事実についての言説だけである。それゆえ、授業には社会についての客観的な真理は存在しない。在るのは解釈だけである。」とされておりまして、「社会科授業で行われているのは客観的な認識ではない。それは主体的な解釈である。」とっています。子どもたちの社会認識について、「授業で子どもたちの経験的に既に持っているものにもとづいて新しいことが分かることである。」というふうに社会科の授業を捉えているわけですが、そうなりますと、歴史の理解というのは再現的な理解でありますので、どうしても言語表現によって社会科術語をかみ砕いていくという方法を明らかにしていかなければならないと思っております。以上です。

寺井 引き続き、細野さんに研究発表2として、発表をお願いいたします。

資料 谷川彰英氏(89、6～8)社会科教科書の機能

プログラム機能	知識伝達機能	教授・学習活動示唆機能	資料提示機能
学習整理機能	索引機能		

資料

日本文教出版『小学生の社会』6年上 P51

信長は、気性のはげしい武将でした。新しい考えをとり入れるいっぽう、延暦寺(滋賀県)をせめて焼き打ちにしたり、信長に反抗しておこした一向一揆の人たちを、みな殺しにしたりしました。人びとは、信長のことを、鬼とよんでおそれたと言われます。(副文)

日本書籍『中学社会 歴史的分野』P119

また、信長と対立する延暦寺を、焼き打ちにした。更に、ねばり強く対抗する伊勢長島（三重県）や越前（福井県）の一向一揆を攻めて、多くの人を殺し、その中心であった大阪の本願寺を降伏させた。

資料

* 古墳は、日本の各地に見られます。

倭（日本）の国では、2世紀のおわりごろ、くにとくにとの争いがなん年も続いた。くにくには相談して一人の女性を王に立てた。

日本は、どのようにして、一つの国にまとまっていったのでしょうか。それはいつごろのことでしょうか。

* 渡来した人たちは、日本の文化を大きく発展させたんだね。

* 奈良に都がおかれたころ、日本と外国とはどのように交わっていたのでしょうか。

* 日本の人口の移り変わり

* 西日本に幕府の力が広がる。

* 元という国が2度にわたって日本にせめてきました（元寇）

* 中国のまねでない、日本の風景をえがいた墨絵がえがかれるようになりました。

* 日本に鉄砲が伝えられました。

* 日本にはじめてキリスト教を伝えた人は、宣教師のザビエルです。

* 日本町 / 日本人が住んでいたところ / 日本の貿易船

* 海外との交流をはかる

* 日本橋

* 日本経済の中心 = 大阪は「天下の台所」

* 日本人古来の考え方 / 日本地図

* 日本の商人の店

学習の問題 / 明治の新しい政府は、どのようにして生まれたのでしょうか。その後、日本はどのように変わっていったのでしょうか。

* 通商条約は、日本にとって不平等な条約でした。

日本の国をおさめる力（主権）は天皇にあると定め、外国と条約を結んだり、軍隊を動かしたりする権限も天皇にあるとしました。

* こうして日本は、憲法にもとづいて議会政治をおこなう近代国家となりました。

* 日本人の生活を西洋ふうにする。

* 朝鮮をめぐる日本と清との対立

* 日本の重工業

* 日本の学者

* 日本には、外国から軍需品や日用品などの注文

* 戦後、日本はどのような道を歩んできたのでしょうか。

* 日本はひどい不景気に見舞われる

* 日本は満州を占領し、翌年には満州国をつくって、政治の実権をにぎりました。

* 日本軍

* 日本は、ドイツや、イタリアと手を結ぶ。